

学芸学部における 英語科カリキュラムの構想

小笠原 林 樹

A Tentative Curriculum for English Majors
at Colleges of Liberal Arts

LINJU OGASAWARA

- 1 いわゆる学芸学部は、大規模の総合大学の文学部、理学部、法学部、経済学部ないし社会学部、教育学部ならびに教養学部の内容を、またより規模の小さい大学の文理学部、教育学部の内容を併せもち、それらを単一学部に圧縮した形のもので、仮りにここでは設定する。

〔注〕 こう設定する根拠は、いわゆる新制国立大学は一県一つの総合的の大学を旨とするようであるからである。もし学芸学部=教育学部と考えると、仮りに工学部と学芸学部しかもたぬところでは、工学と教員養成だけになり、総合的でなくなってしまうからである。

- 2 学芸学部の英語科は、したがって、文学部的英語科、教育学部的英語科、それに教養学部的英語科の性格を併せもったものとする。

〔注〕 ただしいわゆる新制大学と地域社会との関係ということ考えた場合、その地域社会の要求にしたがって、以上のうちどれかの面の性格を特に強くもたせることはあり得るであろう。

- 3 上の2は言い変えれば、学芸学部英語科は、いわゆる英語学英文学、英語教育学*、ならびに英語の総合的技能・教養（これを仮りに現代英語と呼んでおく）を授け学習させるところと考えてよい。

（英語学コース**
英文学コース
英語教育学コース
現代英語コース

これらを仮りに学芸学部英語科の専門コースと呼ぶことにする。

- 4 これらの専門コースはそれぞれの基礎科目ないしは隣接科目と専門科目をもつ。

専門コース { 基礎科目
 { 専門科目

〔注〕 基礎科目と隣接科目を区別して使い分けている人もあるが、ここでは強いて区別しないでおく。

* 「英語教育学」という用語ならびにその概念は、耳新しく響くかもしれないが、筆者はこれについて構想をもっているので、別の機会に発表する用意があることを付言しておきたい。

** ここで英語学、英文学という時、いわゆる英米語学、英米文学という意味も含めているのである。

5 まず各専門コースの**基礎科目**についての試案を掲げる。

- (1) 英語学コースの**基礎科目**としては次のようなものが考えられる。*

現代英語**
 科学研究法
 言語学
 文化人類学
 社会学
 記号学 (コミュニケーション理論)
 論理学
 美学
 文芸学
 心理学
 数学***
 統計学
 国語学 (ならびに英語以外の外国語学)
 英米文学概論
 英米文学史
 世界史 (特に英米国史)

- (2) 英文学コースの**基礎科目**も、同様にして設定され得るが、筆者は文学専攻ではないので、一応いま思いつくものを挙げておくに留める。

[注] この部分ならびに6の(2)の部分は英文学系統の人により検討しなおす必要が大いにあるはずである。

現代英語
 科学研究法
 文学研究方法論
 文芸学
 言語学
 文化人類学
 社会学
 心理学
 美学
 国文学 (その他英文学以外の外国文学)

*以下本稿においてはあるコースの**基礎科目**なり**専門科目**としてしかじかの科学がなぜ必要であるかについてはその根拠は一々述べないこととする。しかし述べなくても、それぞれ然るべき理由があり、それをふまえた上で単にリストとして挙げたのである。

**現代英語とは5の(4)に挙げた基礎英語の上に更に6の(4)で述べる英語の能力の多くを併せ含めたものであるが、いまはこの内容を詳しくは述べないこととする。

***英語学研究に数学のうちでもどういつた種類の数学が必要かはいまは詳しく述べないこととする。

世界史 (特に英米国史)

- (3) 英語教育学コースの基礎科目としては次のようなものが考えられる。

現代英語

科学研究法

言語学

英語学

英文学

国語学

国文学

教育学

心理学

学習心理学

文化人類学

社会学

統計学

世界史 (特に英米国史)

- (4) 現代英語コースの基礎科目としては次のようなものが考えられる。

基礎英語*

英語文体論

文化人類学

社会学

世界史 (特に英米国史)

6 次に各専門コースの専門科目について試案を述べる。

- (1) 英語学コースの専門科目

英語学概論

英語史 (史的英語学) 概論 (他に英語史詳論も考えられる)

英文法概論

英語音声学・音素論概論 (他に詳論も考えられる)

英語学詳論

英語文体論 (含英語修辞学)

英語意味論

言語と文学関係論

言語と心理・文化関係論

比較語学**概論

比較文化概論

* 「基礎英語」とはどのくらいの範囲のものを指すのかについては、いまは常識的にとっておいていただきたい。これのより合理的な設定方法についても筆者は目下検討中である。

** ここでいう「比較語学」とはいわゆる比較言語学 (Comparative Linguistics) ではなく、G. Trager らのいう Contrastive Linguistics のことである。

 英語学演習*

(2) 英文学コースの専門科目

英米文学概論
 英米文学史
 英米文学各論
 英米風物誌概論
 比較文学概論**

英米文学演習

(3) 英語教育学コースの専門科目

英語教育学概論
 英語教育学各論
 英語学習心理学
 比較語学概論
 比較文化概論

英語教育学演習

英語教育実習

(4) 現代英語コースの専門科目

英語聴取
 英語口頭発表
 英語講読
 小説, 随筆, 詩, 劇,
 紀行・日記, 新聞, 文献(論文), 商業文など
 英語作文
 英米文学概論
 比較文化概論
 英米風物誌概論

[注] 以上は枠組みのみで、これら各々の科目の内容について詳しく述べることは困難であるし、また今回はそれが目的ではないので、略すことにする。

7 以上の基礎科目、専門科目の中の相互には必要ならば履習順序を設けたり、学年配当を行

*英語学演習を必要によつては更に英語学演習と英語学原書講読とに分けてもよい。例えばH.B. Allen, *Readings in Applied English Linguistics* を授業で読んでゆくのは後者であり、T.Hardy, *To Please His Wife* の英文を授業で語学的に調べたり分析したりしてゆくのは前者である。以下英文学演習、英語教育学演習についても同様な区別が可能であろう。

**この比較文学の中には、筆者のいう対照文学(Contrastive Literature)も含めてよい。この対照文学の構想については別のところで発表するはずである。

なうこともできるし、またその方が望ましい。

〔注〕履習順序を設けておかないと、言語学概論をとらないうちに英文法概論をとったり、英語意味論をとったりする。これは学生には講義内容が呑みこみにくいということになり、教官にとっては教えにくいということにもなる。

次に（筆者の専攻していない英文学コース、またまだよく構想の熟していない現代英語コースについては差し控えることとして）英語学コースと英語教育学コースにおける基礎科目、専門科目の履習順序の設定と学年配当の一つの例を挙げておく。

この場合、多くの大学の現状のように、1年前期、1年後期、2年前期はいわゆる大学一般教育の履習に当てられ、2年後期より各専門コース別に分れるものとし下表を作った。

英語学コース・英語教育学コースの学科目の範囲と系統試案

	英 語 学 コ ー ス		英 語 教 育 学 コ ー ス	
	基 礎 科 目	専 門 科 目	基 礎 科 目	専 門 科 目
2年後期	言語学概論 文化人類学 科学研究法 世界史 数学 現代英語(1)	英語学概論 英語音声・音素論概論	言語学概論 教育学概論 心理学概論 英語学概論 世界史 現代英語(1)	
3年前期	国語学 英文学概論 英文学史 統計学 記号学 現代英語(2)	英語史概論 英文法概論(1) 英語学原書講読(1) 英語学演習(1)	国語学 文化人類学 学習心理学 統計学 現代英語(2)	英語教育学概論(1) 英語教育学原書講読(1) 英語教育学演習(1)
3年後期	文芸学 論理学 美学 心理学 社会学 現代英語(3)	英文法概論(2) 英語文体論 英語意味論 英語学詳論(1) 英語史詳論 英語学原書講読(2) 英語学演習(2)	英文学概論 社会学 現代英語(3)	英語教育学概論(2) 英語教育学詳論(1) 英語学習心理学 英語教育学原書講読(2) 英語教育学演習(2)

4年前期	現代英語(4)	比較語学概論 比較文化概論 言語と心理・文化関係論 言語と文学関係論 英語音声・音素論詳論 英語学詳論(2) 英語学原書講読(3) 英語学演習(3)	現代英語(4)	英語教育学詳論(2) 比較語学概論 比較文化概論 英語教育学原書講読(3) 英語教育学演習(3)
4年後期	卒業論文		教育実習 卒業論文	

〔注〕上の6の(1)(3)においては専門科目の中で単に英語音声・音素論、英語学概論、英語教育学概論、英語学原書講読となっていたものも、学年配当をする際には更に概論(1)、(2)のように分けられることがある。その場合(1)と(2)は隣りあった学期に配せられるのが普通であろう。また英語音素論の概論が2年前期に、詳論は4年前期にというようになっているのも考えがあってのことである。

8 6のように各コースに分けたからといって、例えば英語学コースの者が英文学コースや英語教育学コースや現代英語コースの中の希望するあるいは必要な科目を履習することを妨げるものではない。

9 以上が筆者の考えている学芸学部英語科のカリキュラム試案である。

基礎科目も多く専門科目も多いことに注意されたい。基礎科目が多くなっているのは、現代の学界においてある一つの学問といろいろの隣接科学との関係が認識され、それぞれの境界領域をはずす必要があると唱えられている傾向と、また専門科目が多くなっているのは、各々の学問自体の専門としての深さがいよいよ深まってきている傾向とも合致するものである。大学が学問と教育の場であるなら、学界のこういう傾向と対応しても一向差し支えないと思う。ただこれだけの内容のものを現行の専門課程2年間(なり2年半の間)にこなせるかどうかは疑問に思う。しかし今回はこなせるかどうかの点はほとんど考慮しなかった。

さて筆者はこういう形が望ましいと一応考えているのであるが、これを尺度にしてある特定の大学、例えば岩手大学の学芸学部英語科の現行カリキュラムを現状分析し批判を加えることはさし控えたい。

10 しかしながら、一般的にいってどこの学芸学部、更には文学部や教育学部でもその英語科の現行カリキュラムを見聞すると、次のような点に問題があると思う。

(1) 多くの英語科は英米文学一辺倒で英語学や英語教育学、更に本稿でいう現代英語の面において不十分である。つまり、いわゆる英米文学に偏っているのである。

(2) 本稿でいう基礎科目に当たるものが、古い内容であったり、充分でないことが多い。

(3) 英語学コースでは、文体論、意味論、比較語学・文化概論の面がほとんど行なわれていない。

(4) 英文学コースでは文学研究法、比較文学の面がほとんど行なわれていない。

(5) 英語教育学コースでは、英語教育の歴史とかいくつかの教授法の紹介があるくらいで、

学として* のレベルにまで達していないし、また言語学との関連は近年かなり説かれていても学習心理学的アプローチがほとんど説かれていない。また比較語学概論や比較文化概論に到っては全く行なわれていないといってよい。

- (6) 現代英語コースは、通常の大学では英米文学コースに包まれ、講読中心でそれもジャンルが文学的なものに限られ、偏重している。また現代よりは時代のさかのぼった作品を与えていることが多い。

このコースは英文学コースに入っているため技能の修得やドリルよりは知識としての履習が行なわれている。

- 11 このカリキュラムを実践するための教官の問題、学生の問題、教材、教具施設の問題、評価の問題、またいわゆる卒業論文の問題などについては今回は触れないことにする。またいわゆる英語科教員免許状取得のための学科目との関連についても本稿では考慮せずに論を進めたこととお断りしておく。

(December 31, 1962)

*ここで「学として」とはということかについても触れずにおく。